2010年（平成22年）
第36号
（12月15日）

平安月報

The HEIAN monthly report

発　行　所：立正佼成会　京都教会
発行責任者：渉外部長　宮地啓安
〒605-0041　京都市東山区三条蹴上
TEL (075)762-2211　FAX (075)762-2266

今日の幸せに感謝の思いを……　「開祖さま生誕会」

１１月１５日、庭野日敬開祖の生誕を祝う「開祖さま生誕会」が行われた。京都教会では、大聖堂での式典の模様が衛星放送を通じて放映された。

庭野会長の法話（衛星放送）

青年女子による奉献、庭野光祥次代会長導師によるご供養、会員代表の体験説法、渡辺理事長のあいさつに続き、法話に立った庭野日鑛会長は、「自灯明・法灯明」の教えに基づいて生きる重要性を示すとともに、毎日を感謝の心で過ごす大切さを強調した。

本部の式典終了後、教会では中村教会長があいさつに立ち、「１１月１５日は本会を創立した開祖さまの誕生日であるとともに、昭和２０年に久遠実成大恩教主釈迦牟尼世尊のご本尊が勧請されたという大切な日だ」と述べた。

中村教会長あいさつ（京都教会）

２支部が発足記念式典　（西京・宇治）

京都教会は発足５１年。１０ある支部の中、宇治支部と西京支部の２支部が周年を迎えた。

……

◇西京支部発足２０周年記念

１１月２０日（土）、京都エミナースにおいて会員約６０名が参加し、西京支部発足２０周年式典が行われた。京炎ふれふれの「京風よさこい」演舞から始まり、歴代支部長と特別功労者である今市さんの紹介とインタビュー、会員へのインタビューやレクリエーションで和やかに執り行わた。

◇宇治支部発足３０周年記念

１１月２１日（日）、宇治支部法座所において、山井和則衆議院議員はじめ市議会議員からの来賓や会員約１３０名が参加し宇治支部発足３０周年式典が行われた。読経供養後、功労者表彰、説法、笠島宇治明社会長による来賓祝辞があり、参加者一同は改めて布教伝道を誓い合った。

平成２３年次京都教会年間目標が決定

平成２３年次の京都教会の年間信行目標が決定した。

「すべてが仏さまのプレゼント
見よう　聴こう　観じよう　伝えよう」

これは、今年に引き続きの採用。法華経の教えの神髄は、すべての現象は「仏さまのものの見方・考え方ができるようになる」ためのものだと、受け取ることだということで、この目標をさらに浸透していくことにした。

お知らせ（１月の教会行事）

１月	１日（祝）	元旦参り	（6：30～）
	７日（金）	ご親教	（8：45～）
	９日（日）	日曜ご親教	（8：45～）
	１０日（月）	開祖さまご命日	（9：00～）
	１５日（土）	成人式	（9：00～）
	２１日（金）～３０日（日）	寒中読誦修行	（6：00～）
	３０日（日）	節分祭	（9：00～）

時事刻々

十二月八日は、お釈迦さまが悟られた「成道」の日ですが、一般的には昭和一六年に太平洋戦争に突入した『開戦記念日』の方が有名だ。

釈尊は菩提樹の下で四十九日間座禅し、心身にわきおこる様々な魔群や誘惑に打ち勝ち、真理を悟ったのがこの日だ。このとき釈尊は三十才だった。

釈尊の教えは、徹底した慈悲の教え・平和の教えだ。釈尊は「不殺生＝すべての命を大切にするのだ」と説いている。

この教えを悟られた日に、その後多数の人命を失うという戦争に突入したというのは、皮肉なことだ。

最近、北朝鮮の脅威に対して、日本も武装強化すべきだという気持ちは理解できる。しかし、戦争は絶対に避けなければならない。

戦争するための準備をするよりも、釈尊が悟られた智慧から学び、平和を目指すべきではないか。

今年もあと半月です。家や身の回りの大掃除だけでなく、自分の心の中もきれいにして、信念を迎えさせていただきましょう。

明るい社会づくり運動の会（明社）各地で大活躍

京都市内をクリーン大作戦（中央明社）

１１月７日（日）、毎年実施されている京都・まち美化大作戦に京都府下各地から各企業・団体・地域ボランティアと共に中央明るい社会づくり運動の会（中央明社）のメンバー６名が参加した。

朝９時半に京都市役所前を埋め尽くす人たちが集まり美化運動開始。参加者はゴミ袋を片手に、約２時間市役所周辺を各コースに分かれてゴミ拾いを行った。

高島屋前で歳末たすけあい募金（中央明社）

１２月５日（日）、中央明社は四条河原町（高島屋前）で、ＮＨＫ歳末たすけあい運動の募金に立った。昨今の景気の低迷からか、ボーナス前なのか、例年より道行く人の反応は薄かったようだが、１万円ほどの募金が集まり、翌日、社会福祉協議会に寄贈された。

ガラシャ祭で「バザー」を出店（乙訓明社）

１１月１４日（日）、長岡京市のガラシャ祭に乙訓明社がバザーを出店した。この祭りは細川忠興へ嫁いだ明智光秀の娘・細川ガラシャ夫人の「愛と感動の物語」を象徴した市民祭りである。今年で１９回目。

乙訓明社は毎年、楽市・楽座にバザー・模擬店を出店。「ここの焼きそばが一番おいしい」と好評の名物の手作り焼きそばを販売した。

また、今回は中央ステージに京都教会から東山普門太鼓が出演。おおとりでの１５分の熱演に会場は大いに盛り上がった。

乙訓明社では、バザー、楽市・楽座で得た収益は、毎年長岡京社会福祉協議会に寄付している。

「ふれあいバザー」を開催（山科明社）

１１月２８日（日）、山科区の大宅フラワーガーデンにて、山科明るい社会づくり運動の会が主催して、第１５回『ふれあいバザー』が開催された。

会員などから集められた遊休品の販売や、焼きそば・みたらし団子などの模擬店に多くの人が集まり、賑わっていた。

今月の言葉　～成道に向けて～　京都教会長・中村憲一郎

今月の会長法話は、１２月８日の釈尊成道会にちなみ「成道に向けて」です。

「成道」とは、**「悟りを開いて仏と成ること」**ですが、このことは私たちの日常とは無縁のことのように思えます。が、仏教では、「成道＝人格完成」は釈尊の専売特許ではなく、実は私たちの人生の最大のテーマであり、人生の目的というのです。

なぜなら、釈尊は2500年前「奇なるかな。奇なるかな。一切衆生悉くみな如来の智慧・徳相を具有す。ただ妄想・執着あるを以ての故に証得せず」と悟られました。「すべての存在が本来は仏」と観じたこの大宣言は、当時も、そして今もなお、とても信じ難いことではあります。目先の現象の変化に一喜一憂し、浮かれてみたり、落ち込んだりする毎日を送る私たちは、「本来は仏」と聞いてもなかなか実感がありません。

無心庵　この花会を主宰する大塚全教さんは、17歳で養父によって両腕を切断されるも、菩薩行に一生を捧げた大石順教尼さんにお仕えした時のことを紹介しています。

大塚さんもまた両手が不自由でしたので、絵筆を口にくわえて書や絵を描く順教尼さんに学ぼうと弟子入りしたのですが、絵を書く前に便所掃除を命じられたそうです。そこで全教さんは「今までやったことがありませんので、できません」と答えると「それでは便所を使ってはならぬ」という返事。困り果てた全教さんを見て、順教尼さんは井戸のところに連れて行き、身をもって井戸水を汲み上げて見せたといいます。その上で「あなたはできないというが、できないのではなくやらないだけ。人間、やればできないことはない。できないとやらないを混同してはならない」と諭されたそうです。この言葉に、全教さんは目の前がぱあっと明るく開けたと言います。

会長先生は「懺悔とは生きる力を育む創造的なもの」とご指導下さっていますが、全教さんのように、自分に足りないところがあると気づいたら、それを素直に認めて精進するところに「成道」に向かう本当の懺悔の姿があり、新たな生、新たないのちの始まりがあるのです。

迷いの中に苦悩する私たちですが、「できない」ことを「できないままに」し、「やろう」とする努力を惜しんで、いのちを粗末にしてしまいがちです。

人生二度なし、持ち前の仏さまの智慧と徳相を発揮して、今生の「成道」を切に願って、お互いさま精進して参りましょう。

●陰を信じる

（佼成会のことば）

私たちは、お金やものなど目に見えるものを頼り、信じ、ありがたいと思いがちです。その心でいると信仰に対しても現世利益だけを求めてしまいます。目に見える結果が出ないと「神も仏もあるものか」と仏の存在を否定し、精進も怠けてしまう。その結果、迷いの多い人生を送ってしまいます。

本来、信仰とはそんなものではありません。信仰の原点に返って目に観えない仏の大いなる働き――生きとし生けるものすべてを生かしてくださっている仏の働きを信じ精進していく。このような境地になって初めて、仏さまに護られているという実感を得て、大安心の境地に安住することができるのです。

それこそ信仰の極地であり、理屈や常識では考えることのできない境地です。佼成会では、仏や法という目に観えないものをあるものと見極めて、信をもって受け入れる心になることを「陰を信じなさい」といっています。ですから、「諸法無我」という目に観えない法則が信じられると、おのずと周りの人や環境に対しても「ああ、ありがたい」「お陰さま」という感謝の気持ちがわいてくるのです。

庭野開祖の宗教観・平和観　「一乗の道」

《イラン特使の来訪》

イランの最高指導者であるホメイニ師は、大変なカリスマ性を発揮して、イスラムの教えを政治の前面に出した祭政一致の体制をとり始めた。「右の頬を打たれたら左の頬を差し出せというのは間違いだ。そういう時にはキリストも実力を行使したであろう」と断言するのである。**釈尊が「恨みに恨みをもって報いるとき、恨みは消えることがない。恨みを捨てたときに恨みはやむ」**と教えられたのとは、まったく正反対の考え方である。過酷な砂漠に生まれた宗教と、森に生まれた宗教の違いと言えばいいのだろうか。

釈尊のお弟子の提婆達多(だいばだった)は自分の力を過信して、当時インドの大国だったマガダ国の太子をそそのかして父の王位を奪わせ、その庇護をかさに釈尊の教団を自分にゆだねるよう迫った。それを拒まれると、あらゆる手段で釈尊のお命を狙った。釈尊のお弟子たちは「提婆達多を許すことはできない」と騒ぎ立てたが、釈尊は「私が悟りをひらいて多くの人々を救うようになれたのは、提婆達多がいたからである。提婆達多は私にとって善き師であった」とおっしゃられている。

人と人の関係、国と国との関係で、互いに直接ふれあい、話し合う機会がないと誤解が生まれ、それが不信を生み、警戒心、敵意へとふくれ上がっていく。すべての人々を仏の子、神の子と信じる宗教者は、その不信や警戒心を解きほぐす役割を与えられた者と言えよう。対立のどちらかに組み入れられて対立を絶対的なものにしてはならないのである。

イランの米国大使館人質事件は、１年３ヵ月目にようやく大使館員全員が解放された。そのあくる月、ホメイニ師はイラン政府特使として、シーア派の最高指導者であるハシミネ・ジャド師を立正佼成会に派遣して、人質解放の経緯について説明し、**「日本はアメリカとの関係で微妙な立場にあったにもかかわらず、宗教者としてイランの立場を理解し、勇気ある支援を頂いたことに心から感謝する」**と伝えてきたのであった。

《天台山での誓い》

インドの霊鷲山、中国の天台山、日本の比叡山への参拝は、庭野開祖が法華経に遇うことができた時から、心に抱いてきた強い念願だった。インドの霊鷲山は、釈尊が法華経を説かれた地である。その霊鷲山には昭和 39 年に参拝することができた。この時は直子夫人と日鑛会長を伴っての仏跡参拝で、三人で一緒に旅行をするのは初めてのことであった。

霊鷲山の山頂で香を供えて法華経を読誦すると、釈尊の説法をじかに聞いているような思いがして、法華経に遇い得た有難さが胸に迫った。仏教徒として霊鷲山を訪れた方が、みな一様に感じるのは、「ここで釈尊が説法されたのか」という思いと、はるばる来つるものかなという言い難い感激であろう。

また、比叡山には昭和 44 年に参拝させて頂いて以来、即真周湛座主、山田恵諦座主に、様々なご教示を頂いてきた。だが、中国の天台山だけは、当時の国情から自由に参拝することが許されず、庭野開祖は中国仏教教会を通して天台山に参拝させてもらえる機会を待っていた。そして、その願いが叶えられる時がきたのである。

中国の浙江省天台県の北にそびえる天台山の麓にある国清寺は、隋の時代の 598 年に天台大師智顗によって開かれた、1400 年近い歴史を持った寺である。天台大師智顗は、23 歳のころ師である南岳慧思の門をたたいて大きな影響を受けたと言われているが、のちに、この天台山で仏典の研鑽に没頭され**「釈尊の一切経の要は法華経にある」**として、天台教学を大成した巨星である。それから約 200 年後、遣唐使として中国に渡って天台山で学んだ伝教大師最澄が、日本に帰国して比叡山を開いた。伝教大師がこの天台山を目指したのは延暦 23 年(西暦 804 年)のことであった。

この時、備前の田ノ浦を四隻で出港した遣唐使船は、途中で暴風雨に見舞われて二隻になり、その二隻も、別れ別れになってしまった。　(つづく)

仏教を生活に生かす　「日常生活の中の仏さまの教え」

《本願につながる・・・大安心》

本当に仏法を信じ、一心に修行した結果起こった変化ならば、その人が仏法の正しいレールに乗ったために生じたものに違いないからです。例えば、現象的にはマイナスに見える変化でも、その人の人格に磨きをかけるためのひとつの過程だということもありうるのです。ですから、その時点においては気に入らぬ変化でも、素直にそれに従い、相変わらず仏道の修行を怠らずに続ければ、その気に入らなかった変化自体が、長い将来の幸福の基礎となるのです。

ある男性が、60歳を迎える頃、母親が介護を必要とする状態になりました。**「さて、今度は仏さまの願いをどう実現するおはからいなのだろう」**と考えました。妻と相談し「まだもう少し会社のために役に立たなくてはならないが、今まで出来なかった親孝行をさせてもらおう」と、給与が半減することを承知で役職を退きました。

そして仕事を３分の２に減らすと、その分の時間を母親と過ごすことにしました。今では母親を中心にした生活になり、妻とも心を合わせ、今まで以上に協力し合うようになりました。この男性はいつも、様々に変化する現象にとらわれることがなくなり、仕事があることも、ないことも、親の介護さえも仏になる道そのものであり、「みんな自分に必要なこと」という見方で、目の前の一つひとつの出来事に仏さまの願いを感じて歩んでいけるようになりました。

「みんな自分に必要」といっても、本当に仏さまの願いにつながるためには、どんな時もまわりの人との間に温かい心の通い合いができたかということが、大きなポイントになります。言葉を換えて言えば、自分の仏性と相手の仏性が触れ合ったがどうか、ということです。これこそが、仏さまの願いにつながることです。

仏さまの願いにつながった時、光っているものが光っていると見え、大安心で生きていけるのです。庭野開祖は**「自分が正直だから、自分が疑うところがないから、本当のありのままの姿で、仏道を正直に行じていると、心に一番の安心ができてくる。これほどの安らぎはない」と言っておられました。「仏さまに教えて頂いたことを、守らせてもらっている」というところに、安心が生まれ、「もう、心配しなくても、仏さまがお護り下さっている」という大安心につながるのです。**

仏さまの見方とは、相手の尺度に合わせる、温かい見方です。どんな時にもこの見方ができるか、それが、私たちが仏さまから頂いた課題です。**慈悲の眼で、仏さまのような見方ができるようになった時、私たちは大安心を得て、救われるのです。**

私たち kinki.genki　～和歌山教会より～

ホームページは　http://www.rkk-kinki.jp/　へ

●「パパとママの勉強会」家庭教育セミナー

１１月１３日(土)に、平成２２年度の家庭教育セミナー(２回目)が開催されました。

東京家庭教育研究所より青木益美講師さんを迎え、「パパとママの勉強会」～子どもから学び築こうあたたかい家庭～を演題にセミナーを実施しました。現在子育て中の方、これから子育て世代になっていく方を中心に２８名が受講し、胎児期の母親と子どもの関係の重要性を学ばせて頂きました。講師さんは、受胎前から夫も妻もストレスをためずに心身共に整えておくことが大切であり、それは心がけ次第で誰でもできることであると熱く語りかけて下さいました。

また、子どもは授かりものであり、お母さんに「大好き」と伝えるために自ら選んでその人の元に生まれてくるとも教えて頂き、親が子どもから学んで成長していくことを再確認させて頂きました。はじめて、参加して下さった１ヶ月の子どもを持つお母さんは、「私は生まれてからこの話を聞きましたが、２人目の時に生かしていければと思いました。次もぜひ聞きたいと思います。」と感想を述べてくれました。

渉外部からのメッセージ

早いものでもう師走。今年のキーワードを振り返ってみると「普天間基地」「ハイチ地震」「バンクーバーオリンピック」「口蹄疫」「参議院選挙民主党惨敗」「尖閣諸島問題」「日本人ノーベル賞受賞（鈴木さん・根岸さん)」「八ッ場ダム中止棚上げ」等が挙げられますね。特に今まで意識していなかった国の領土問題と安全保障の問題は国民一人ひとりが認識出来たように思います。皮肉にも政権交替のおかげでしょうか…。

この月報を読まれて感想などがありましたらお気軽にお寄せ下さい。　RKK 京都教会　FAX 075-762-2266